

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 85

2021年11月

Special to the Newsletter

「四大文明」から「六大文明へ」？—「高地文明」の発見にむけて

山本 紀夫

「四大文明」に対する疑問

「四大文明」という言葉がある。「大河文明」ともいう。この「大河文明」説は、日本の中学や高校の教科書にも載っているのだから、日本人であればほとんどの方が知っているだろう。世界の古代文明は、4つの大河のほとりに生まれたという説である。すなわち、エジプトではナイル川のほとりで、メソポタミアではチグリス・ユーフラテス川のほとりで、インドではインダス川のほとりで、そして中国では黄河のほとりで古代文明が誕生したというのである。

この説に私がはじめて疑問をいだいたのは、もう50年以上も前の1968年のことであった。この年、私は京都大学の調査隊に参加して、はじめてペルーやボリビアなどの中央アンデスを半年ほどかけて車で駆けまわっていた。調査の主目的は、中央アンデス原産の栽培植物の起源を探り、農耕文化の特徴を明らかにすることであったが、その道中でマチュピチュなどのインカ帝国やそれ以前にアンデスで生まれた諸文化の遺跡を目にすることができた。また、各地の博物館などでも、きらびやかな黄金製品や美しい織物、そして多彩な土器などのアンデス文明の遺物を見ることができた。私たちが駆けめぐっていた地域は、はからずも古代アンデス文明が誕生し、発展したところだったのである。

こうして、私はアンデス文明に関心をもつようになった。それとともに、なぜアンデス文明は旧大陸の「四大文明」と同等に扱われないのだろうか、という疑問が生じてきたのであった。とはいえ、当時の私は農学部の学生であり、アンデス文明に関する知識もほとんどなかった。そんな私でもアンデス文明は文字を欠いていたことを知っていた。そして、文字の使用は文明成立の必須条件とされていたので、それゆえにアンデス文明が「四大文明」と同等に扱われないのかもしれない、と思った。同時に、文字の存在は文明成立の絶対的な条件なのだろうか、という疑問も生まれたのであった。

その後、私はメキシコや中央アメリカに行き、マヤやアステカ、そしてテオティワカンなど

の遺跡を見たことによって、「四大文明」説に対する疑問はいよいよ強くなっていった。アンデス文明だけでなく、中米に栄えたメソアメリカ文明も「四大文明」に匹敵するほどに大規模で、すぐれた文明であると思えたからである。

その後、私は栽培される植物よりも、栽培する人間に関心を移し、農学から民族学（文化人類学）に転向した。そして、主として人びとの暮らしと自然環境との関係の研究を始めたため、「古代文明はどのような環境に生まれ、どのようにして発展していったのか」ということに関心をもつようになった。たしかに、この点から見ればアンデスにも中米にも大河はなく、そこでは大河文明は誕生しなかったといえる。しかし、だからと言ってアメリカ大陸では古代文明は誕生しなかったといえるのだろうか。実際、新大陸を専門とする考古学者も歴史学者も、アンデスで生まれた文明をアンデス文明、中米で生まれた文明をメソアメリカ文明とって、これらをまとめて古代アメリカ文明という言葉をつつうに使っているのだ。

「四大文明」に対する異議申し立て

一方で、最近、この「四大文明」に対する異議申し立ても目立つようになってきている。たとえば、次の文章は新大陸文明に詳しい増田義郎によるものだが、「四大文明」にかえてメソアメリカ文明とアンデス文明をくわえた「六大文明」説を提唱するようになっている。

わが国では、アメリカ大陸の固有文明について知られるところが少なく、また専門家たちも、アステカ、マヤ、インカの文明は旧世界の古代文明に比べれば遅れたもの、劣ったものであると断じて怪しまない。そして、エジプト、メソポタミア、インダス、中国を「世界の四大文明」と呼ぶ。しかし、この呼称は間違っている。アメリカ大陸の固有文明は、旧世界の古代文明に劣らず独創的であり、注目すべき特徴を持ち、いくつかの点では旧世界の諸文明よりすぐれてさえいる。したがって、われわれは、「世界の四大文明」に新世界の二大文明、すなわちメソアメリカ（古代メキシコとマヤ）、中央アンデスを加えて、世界の六大文明を論ずべきなのである（増田、2010）。

増田のほかにも、この六大文明説に賛意を示す研究者がいる。新大陸専門の考古学者であり、マヤの専門家でもある青山和夫も次のように述べている。

文明の誕生に必要なのは、川ではなく、安定した食糧の供給である。（中略）人類史を正しく再構成するためには、時代遅れの「四大文明」史観を乗り越えて、「世界六大文明」を形成した旧大陸とアメリカ大陸の大文明を対等に位置づけなければならない（青山、2012）。

たしかに、新大陸文明を正しく位置づけなければならないことはいうまでもないが、それをこれまでの「四大文明」にくわえて「六大文明」とするのはいかがなものであろうか。それというも、ほとんどの日本人にとって世界の「四大文明」は大河のほとりで生まれた「大河文明」と刷りこまれているので、「六大文明」といえば大河文明と思われるかもしれないからだ。しかし、中米にもアンデスにも大河は流れていないのだ。

そもそも世界の「四大文明」説 = 「大河文明」説は、いわば定説のようになっているが、この説はいつ、誰が提唱した説なのであるか。これが意外にわからないのだ。文献などをひもといてみても、「四大文明」について明確に述べたものは、少なくとも私が調べたかぎりではない。なかには、この点について次のように述べる研究者さえいる。

「四大文明」なる言い方は「言いえて妙ではあるが、学説等ではなく、所詮は半世紀以上前に作られたもっともらしい言い回しに過ぎない。「御三家」とか「七福神」のように、ある数からなるセットで覚えておきましょうという、教育者による思いつきに過ぎないのである（後藤、2015）。

たしかに、日本の教科書に「四大文明」説があらわれたのは戦後間もない 1951 年のことであった。それから 70 年もたち、時代遅れとか、思いつきにすぎないと批判されているにもかかわらず、この説は依然として修正されることもなく教科書に掲載されているのだ。これはなぜだろうか。おそらく、これは従来の「四大文明」説が地球上の大きな部分を占めるアメリカ大陸を無視し、そこで生まれた独特の文明を考慮に入れていなかったからではないか。だからこそ、「四大文明」説にメソアメリカ文明やアンデス文明の追加が叫ばれるのであろう。

これは見方をかえれば、全地球的なスケールで地球上の環境と人びとの暮らしの関係を見なおさなければならない、ということではないか。つまり、文明をもっと総合的に、そして俯瞰的に見直さなければならない時代が来ているのではないか。そのように考えて、私は最近、「大河文明」を否定し、大河文明にかえて「高地文明」を提唱するようになった。これは、メキシコ、アンデス、チベット、エチオピアなどの熱帯高地に誕生した文明を「もう一つの四大文明」として、私自身が考え出したアイデアを中公新書で発表した。ご関心のある方にはお目通しいただいたうで、忌憚のないご意見、ご批判をお寄せいただければ幸いです。

（やまもと・のりお／国立民族学博物館名誉教授）

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌 (76)

新井 正一郎

Sightseeing (観光) 18世紀後半になるまで人々は楽しみ、気晴らしのために旅することはなかった。旅に出るということは、通常、仕事と関係があるため、町に行くことを意味した。というのは、仕事に必要な情報は町や都市に集中していたからだ。1792年、イギリスのある仕立屋は、7週間かけてフィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、ハリファックスといった都市を回ったが、その「理由は、うわさは高いが、ほとんど知らない国の衣服産業の実情を学びたかったからだ」と語っている。

ところが1820年代になると、川を遡る蒸気船と運河の実現や万物の尺度を感情におくロマン主義運動によって、旅の意味が変わりはじめた。特にアメリカの大自然の崇高な姿はパラダイスだというロマン主義の主張で、一握りの豊かな層は、日常世界の制約から解放され自然の中で自由な楽しい時を過ごすようになった。彼らの好んだ行き先は、ハドソン川とコネティ川の周辺といった自然豊かなニューイングランドの北東地域であった。1830年にはアメリカ版グラントツアーが生まれた。このツアーの参加者は、多くの場合ニューヨーク市から当時の高速艇ともいべき蒸気船で、ハドソン川を遡り、途中ニューヨークの金持ちの田舎の別荘や自然の中に点在する美しい村を眺めながら州都オルバニーに至った。オルバニーではいくつかのオプション・ツアーができた。なかでもエリー運河を船でまたは運河沿いの道を駆馬車でエリー湖、ナイアガラの滝へのコースは人気があった。当時、オルバニーからナイアガラまでは数日かかったが、馬車はナイアガラで1週間近く滞在する旅行者であふれていた。1840年までにはこれらの旅行者を対象に観光案内書が出版されるまでになる。1840年までに10版を重ねたG・M・デイビソンの『はやりの旅』には、自然と深くかかわれる地として、ナイアガラやコネティカット渓谷を一望できるマウントホリヨークやホワイトマウンテンなどが紹介されている。

自由な時間と十分な収入のあった1830年代の作家ナサニエル・ホーソーンは、新しい感動と経験を求めてしばしばナイアガラの滝やホワイトマウンテンの雄大な風景を訪ねた。その経験を基に描いた旅行記『思い出のスケッチ』は、鉱物学者、医師、2組の新婚者それにジョージア州の紳士によるホワイトマウンテン観光の話だ。自然光景の人気は創意に富んだ人々に旅行事業への参入を促した。例えばホワイトマウンテンの旅行業に最初にかかわったアベル・グラフォードと息子たちだ。1803年、ニューハンプ州が民間業者と有料道路建設の契約を結ぶと、グラフォードはその

業者の下請け作業員として山あいまでの道路建設、保守点検を請け負った。数年後にはグラフォード一家は道路沿いに荷馬車の御者向けに3軒の宿を開業した。その後、数人の旅行者が山あいを抜けて、ホワイトマウンテンを目指すようになると、これからは観光事業が大きな収益になると確信した。特に息子のイーサン・アレン・グラフォードは利用者向けにマウントワシントン（ホワイトマウンテンの最高峰）の新しい観光ルートをつくるだけでなく、地元紙に自分たちの宿と周囲の素晴らしい景色の広告を出すなど、この事業に不動の基礎を与えた。1827年から1839年までの彼の宿の宿帳には次の作家の名が記載されている。ワシントン・アーヴィング、ナサニエル・ホーソーン、ヘンリー・ディヴィッド・ソロー。

世紀転換期の1900年、ニューヨークがハドソン川沿いに2段の高速道路の開通に成功し、マンハッタン島南部に高層ビルなどを次々と建設して大都市に発展すると、観光という産業が現れた。つまりニューヨークの近代性を大きなメガホンで田舎の旅行客に説明するガイドや客引きや土地言葉で「ラバーネック・ワゴン」(rubberneck wagon)、「ラバーネック・オート」(rubberneck auto) などと呼ばれていた乗り物が登場した。最初「ステージ」と呼ばれていたこれらの馬車会社の馬車は、5番街の高級住宅地を行き来して、そこに住むヴァンダービルト、ロックフェラーなどの金持ち連中の大邸宅を観光客に見せて回ったので旅行客だけでなく、ニューヨーク市民も乗るのを好んだ。まもなくこの馬車会社はツアー客がさらにいい展望を持てるようにと、屋根の上に席を設けただけでなく、5番街の大富豪を一人一人説明するパンフレットまで用意した。フラットアイアン・ビル前からスタートしていたこれらの乗り物のなかには、バワリーの貧民街、娯楽場コニーアイランドなどの観光地を回るものもあった。

ついでに記すと、見物車に乗った観光客は、さながらガチョウのように首をのびして辺りをきょろきょろ見物していたことから、「ゴム首」(rubberneck)と呼ばれるようになった。この時期のニューヨークの生活を描いた作家にノースカロライナ州生まれのオー・ヘンリーがいる。馴染みの薄い人々で溢れるニューヨークに住む孤独な市民が救われるこの都市独特の「魔法」(温かい感情) —これは今なお彼の物として残るものだ。彼は『ラバーネック・オート』(1906)という短編のなかで、客でいっぱいの見物車を次のように書いている。「ラバーネック・オートは出発するところであった。歩道はその観光客を見ようとして集まってきた他の観光客でごったがえしていた」。また別の短編では歩道のやじ馬的な他の観光客について、こう述べている。「好奇心のかたまりのような連中は、何か異常な事件でも起こると、蠅のようにたかってきて、押し合い、息もつかず眺めている」。

(天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長)

【アメリカス学会夏期定例研究会・発表要旨】
 在日ブラジル人の進学を左右する社会的要因
 ―編成的資源に着目して―

大川 ヘナン

1990年以降に出入国管理及び難民認定法(入管法)が改正され、多くの外国人が来日を遂げるようになった。外国人が日本社会に編入することで多くの課題が発生することになった。2018年には再び入管法が改正されることになったが、これまでの問題点を反省しない形で改正され、多くの問題が残されることになった。解決されずに残っている問題の一つが外国人労働者たちの子息の教育問題である。これまでに外国人児童生徒の学校適応や高校進学、または労働市場への移行が議論をされてきたが、大学進学に関する議論には未だに検討の余地が残されている。

本報告では大学進学率が特に低い在日ブラジル人家族に着目をして、これらの家族が進学において、どのような社会的要因が分岐を作っているのかの検討を行なった。本報告では移民家族が進路選択にあたって、どのような資源を活用できて、もしくはできなかったのかをWallman(1984=1996)の編成的資源を援用して分析を行なった。編成的資源とは古典的で不平等に分配される「土地」「労働力」「資本」という構造的資源ではなく、万人が自由に編成しながら活用することができる「情報」「時間」「アイデンティティ」という資源が人々の選択に影響を与えるというものである。

調査の結果、進学家族と非進学家族の間にはこれらの編成的資源の活用に差があることが明らかとなった。はじめに「情報」である。情報は経済的な困難を乗り越えるために必要な奨学金などと直結しており、早い段階で情報を入手することができるのが重要であった。進学家族が早い段階で入手できた一方で、非進学家族では入手が遅く、結果必要な資金を確保で

きなかった。

次に「時間」である。時間の資源は時間の活用はもちろん、出稼ぎ移民である親の経験をいかにして若者が継承し、将来設定に組み込むことができるのかという過去と未来を捉えた資源である。進学家族の親が積極的に出稼ぎ労働者としての苦労を若者に共有することによって、「工場労働でない働き」を達成するために大学進学を明確に位置付けていた。一方で、非進学家族では経験の共有は積極的に行われておらず、外国人であることや学歴が人生においてどのような変化を与えるのかを提示できずにいた。

最後にアイデンティティである。進学家族の若者は日本社会における差別的な境遇に直面することによって反発的なアイデンティティ(Portes・Rumbaut 2001=2014)を形成していた。反発的なアイデンティティによって、学歴を手に入れて社会を変革していく意思を持つことになる。一方で非進学家族においては日本社会における不遇や不平等に対しては受け入れている姿が見られた。反発的なアイデンティティによって進学の意思は明確になるが、必ずしも学歴によって社会を変えようという正当な手段を取るとは限らず、反発的なアイデンティティ形成は諸刃の剣となり得る。

本報告で明らかとなったのは移民家族が教育達成する過程において、資源の獲得のタイミングや意味づけが重要となることであった。移民家族は日本社会において入手できる資源は制限されている。そのため学校を始めとした行政からの支援が必要であるが、現実問題としてそのような支援が欠けている状況である。そこで移民家族が日本社会で教育達成を遂げるには資源の意味づけや活用方法を工夫することが求められている実態が明らかとなった。

(大阪大学大学院人間科学研究科)

コスタリカにおける「環境」と先住民性

—節合理論からの一考察—

額田 有美

今日、自然災害や気候変動をまえに私たちの福利 (well-being) に不可欠なものとしての「生態系サービス」とその保全の必要性が世界各地で議論されている。その保全策の1つとして注目されているのが「生態系サービスへの支払い (Payment for Ecosystem Services, PES)」—これまでは無償で享受できていた「生態系サービス」(≡「環境」)に価格をつけ、これに「お金を払う」仕組み (cf. 柴田 2019)—である。そして発表者がこの10年ほど人類学的調査を続けているコスタリカは、PESをいち早く法制化した国である。

すでに着手されている実際の仕組み・制度であると同時に研究対象ともされるPESについては、生物学や経済学などからの研究が多いものの、人類学からの研究も蓄積されつつある。人類学的アプローチに共通する特徴は、PESなどの市場メカニズムにもとづく「環境」の管理や保全に「まき込まれる」側の人びとの視点に焦点を当てる点にある。これらの研究者のなかには、PESがいかに人間中心主義的で市場主義的かを徹底的に批判する立場と、PESの構造的問題を認めつつも、否定的なものだけではない何か—具体的な実践のなかで思わぬかたちで生じるそのときどきの状況、「偶発性 (contingency)」や「(再) 節合 (articulations) (cf. クリフォード 2020; Clifford 2001)」—に注目する立場がある。

「先住民性」への研究関心からコスタリカのPESを論じる発表者は、後者の立場より、PESをローカル、リージョナル、ナショナル、グローバルといったさまざまなレベルでプレイヤー(ないし主人公)たちが出会い、その関係性のなかで「先住民性」がダイナミックに生み出されている場と捉え (cf. 池田 1996)、インディ

ヘナ居住区に暮らす人びとがいかにこの仕組みにまき込まれながらも主体的に関わろうとしているのか、またそのなかでどのような状況が生じたのかを、2019年夏までに実施した現地でのフィールドワークと、オンラインでの補足調査より報告した。まず、発表者の調査地カバグラで(1)いつ頃から(2)どのようにPESが始まり、(3)住民は具体的にどのような活動を行ってきたのかを整理した。そのうえで、カバグラの唯一の「土地所有者」である自治体ADIの収入源の多くをPESからの収入が占めるようになったことを示した。次に、PESからの収入増加に伴う具体的な変化として、居住区内の交通インフラの整備や人件費(森林警備隊など)の充実がみられた一方で、ADI執行部による「着服・横領」の噂や住民間の経済格差など居住区内のコンフリクトの火種が増えつつあることを指摘した。また、PESへの参加とその継続に伴うより大きな変化として、カバグラ住民と外部の人びとの関わり方がより双方向的なものへと変化しつつあることや、コスタリカの歴史上例をみないほど、国家と交渉する主体としての「先住民」の存在感が大きくなっていることも指摘した。

[参考文献]

池田光穂 (1996) 「コスタリカのエコ・ツーリズム」山下晋司他編著『移動の民族誌』岩波書店、pp.61-93。

ジェイムズ・クリフォード (2020) 『リターンズ 二十一世紀に先住民になること』星槿守之訳、みすず書房。

柴田晋吾 (2019) 『環境にお金を払う仕組み PESが分かる本』大学教育出版。

Clifford, James. 2001 *Indigenous Articulations*. *The Contemporary Pacific*, 13(2): 468-490.

(国立民族学博物館外来研究員)

漫才を用いた新しい言語教育

種中 恵

2021年7月17日天理大学アメリカス学会・夏期定例研究会にて、現在私が携わる「漫才で覚える言語教育プロジェクト」の活動とその教育的効果について研究発表を行った。貴重な機会を与えてくださった山田政信先生には心より感謝申し上げます。

「漫才で覚える言語教育プロジェクト」は、学習言語で漫才を作成し発表する学習方法で、現在日本語、英語、スペイン語、フランス語、ポルトガル語で展開している。プロジェクトメンバーは吉本興業所属の国際夫婦漫才コンビの「フランポネ」、スペイン語大好き芸人の藤田ゆみ氏、元青年海外協力隊で英語の教員免許を持つKo氏。これまで日本語学校、大学、高校、市町村などを対象に授業を実施してきた。どの言語の授業でも学習者の四技能を最大限に活用する。漫才のサンプルネタを学習言語で聞き取るリスニング、書かれたサンプルネタを読んで理解するリーディング、相方とネタを作る際に話したり書き取りをするので、スピーキング能力やライティング能力も必要とされる。授業の最後に作った漫才を発表するので、創造力や想像力が鍛えられ、主体的にコミュニケーションを取ろうとする力が育成される。

勤務校で担当する英語の授業内で学習言語を用いた漫才作成の授業を実施した。全員が英語漫才を作成し、発表ができるか懸念をしていたが杞憂に終わった。参加した学生全員がいつもとは違った授業に興味を持って生き活きと参加し、自作の漫才を授業の最後に楽しく発表することができた。

6月には山田政信先生のゼミとオンラインで繋いで「漫才で覚えるスペイン語」の合同授業を実施。日本語に似ているスペイン語を用いて漫才形式で冗談を作ることで、スペイン語に対しさらに興味・関心を持ち、会話表現を覚えた

り、語彙力を増やすことをねらいとしている。最終的には全てのグループが自作の漫才を発表することができ、オンライン越しではあるものの普段は接する機会の少ない大学生と交流を楽しむ生徒の姿が印象的だった。

本授業では、言語だけでなく漫才形式のやり取りで学習言語の国の文化も学ぶことができる。

定例研究会では、学生たちへのアンケート結果を提示しながら、授業の効果や課題点などを発表した。また、発表者である先生方から「言葉遊び以上の言語学習となるための課題」についてのご指摘や、「ジェスチャーも文化の一つであり、漫才の中に取り入れられる」などのご提案も頂き非常に勉強になった。学習者のレベルに合わせた授業内容や、さらに深い学びにつながる授業内容を今後研究していきたい。

それぞれの国で笑いやユーモアの感覚は異なる。ブラックユーモアや風刺がポピュラーな国もあれば、ご法度となる国もある。その国の笑いを知ることで、国民性や文化を学ぶことができるので、非常に興味深い。これらの各国の笑いの違いは漫才の授業の講義にも取り入れている。

現在では言語習得だけでなく、SDGsの17の課題の内容を学べるSDGs漫才や放課後等デイサービスや福祉施設を対象とした漫才のワークショップなど幅広く活動している。

日本の大衆文化である漫才を体験し、笑いながら楽しく学ぶ。これまで実施したどの授業も、笑いであふれた平和的な雰囲気があった。外国語漫才づくりが一つの言語学習の方法として確立し、普及できるよう研究を重ね活動を継続していきたい。

(関西インターナショナルハイスクール)

英語教科書におけるタスク分析からの考察

－主体的・対話的で深い学びをめざして－

江草 千春

近年では、初等、中等、高等教育のあらゆる教育現場において「主体的・対話的で深い学び」、つまり、アクティブ・ラーニングが教育方法の1つとして、盛んに用いられるようになってきている。これは、おそらく科学技術の発展が急速に進む現代社会において、答えのない課題に対して、どのように最適解を求めていけばよいのであろうか。そして、それに対する1つの解決策として、他者とのコミュニケーションによる意思疎通が、今まで以上に重要になっているのかもしれないからである。第2言語習得研究においても、1980年代後半からコミュニケーション活動を行う時に、タスクを用いた授業実践や研究が多くなってきている。タスクは、様々な研究者によって定義されているが、主要なものをまとめると、意味の伝達を重視した活動であり、解決するために結果を出す必要があり、現実の世界に即した情報のやりとりがある、ということである。また、タスクを行う時には、その英語力を測る測定方法として流暢さ、正確さ、複雑さの3つの尺度が用いられることが多い。そして、タスクの中に含まれている、情報の分布が単方向性、あるいは、双方向性であったり、もしくは、情報処理作業量が少なかったり、あるいは、多かったり、というタスクの特徴を調査することで、どの尺度に、効果的な影響を与えるか、という研究が行われている。

本研究では、2022年度から実施される高等学校の新しい教育課程に配置される英語コミュニケーションIの教科書で、採択数の多い4冊を分析対象とした。教科書の各レッスンの最後に記載されているタスクについて、タスク分類項目表を用いてタスク分析を行い、流暢さ、正確さ、複雑さにどのような効果を持つタスクが多いのかを考察した。

結果は、全体的には、情報の分布が単方向性で、

作業の操作が情報検索型で、情報処理作業量が少ないタスクが多かった。一方、タスク分析を行った4冊の教科書のうち、1冊については情報の分布が双方向性で、作業の操作が情報変容型のタスクが多い結果となった。この結果から示唆できることは、江草・横山(2007)の結果と同じ傾向となっているので、情報の分布が単方向性で、作業の操作が情報検索型で、情報処理作業量が少ないタスクは、流暢さに効果が期待できる可能性がある。

また、年間授業計画にどのようにタスクを配列すれば、流暢さ、正確さ、複雑さを、バランスよく伸ばすことができるかについては、次の2つの方法が考えられる。1つは、本研究で分析した教科書の1つについては、10のタスクすべてが、情報の分布が単方向性で、作業の操作が情報検索型で、情報処理作業量が少ない、というタスクの特徴を持つので、流暢さに効果が期待できる。そのため、タスクを行う時に、10分から15分程度の事前活動を組み入れることである。この活動を入れることで、複雑さに効果が期待できたり、あるいは、熟達度が低い学習者には、正確さに効果が期待できたりする可能性がある。もう1つは、タスクの特徴の要素を変更する方法である。情報の分布が双方向性で、作業の操作が情報変容型で、情報処理作業量が多いタスクは、正確さと複雑さに効果が期待できる可能性がある。そのため、教科書のタスクに、上記の特徴を含むタスクを付加することで、正確さと複雑さを伸ばすことができる、と考えられる。

最後に、「主体的・対話的で深い学び」から授業を構成したり、改善したりするとともに、「指導と評価の一体化」もこれからの英語教室において、ますます避けては通れない問題となってくる。そのため、この学びを効果的に推進していくためにも、教師は、タスクを分析して、それを授業で活用し、生徒の成長を適切に評価していくことが鍵となる。

(北海道岩見沢東高等学校)

ポルトガル語の音声教育

村松 英理子

2021年度、京都外国語大学ブラジルポルトガル語学科の新生53名に音声指導に関するアンケートを実施した結果、大学入学以前にIPA（国際音声記号）を学んだことのある学生は、わずか4名であった。一方、53名全員がポルトガル語の発音を向上させたい、とし、9割近い学生がネイティブ、またはこれに近い発音を目指したいと回答した。しかしながらポルトガル語の音声教育には、未だローマ字読みで良いというような誤った認識も存在し、目下最新のポ日辞書である、プログレッシブポルトガル語辞典（2015）⁽¹⁾にもカタカナ表記が用いられるなど、初学の音声教育で扱うべき様々な点が見過ごされ、十分な指導がされているとは言い難い。

その例として、まずavó/o/（祖母）とavô/a/（祖父）の対立に見られる開口音と閉口音がある。現行では、両者は単に口の開きの違いによってのみ解説されているが、日本語とポルトガル語の母音フォルマントを比較すると、日本語の後舌母音はポルトガル語より前寄りに位置していることがわかる。つまり/o/について言えば、口の開きだけではなく、舌の前後にも注意を払わねばならない。日本語の「オ」よりも舌を後ろに引くことを意識し、/a/にならない程度に口を開く、と説明することが必要となる。さらに/a/では、口をすぼめて円唇にすることで、/o/との区別が付きやすくなる。また、フォルマント比較から、もう一つ付け加えたいのが、日本語の「ウ」の特徴である。弁別的ではないものの、日本語の「ウ」はかなり前舌である一方で、ポルトガル語は円唇の後舌母音であり、発音時の聴覚印象としては、かなり口腔前方に空間を伴った響きとなる。

続いて、ポルトガル語の平叙文と疑問文を区別する標識、イントネーションについてであるが、疑問文イントネーションに関する解説もま

た、単に尻上りになる、上昇調になるなど漠然とした記述がなされている。しかし、音声分析ソフトPraatによる分析で、ブラジルとポルトガル⁽²⁾とは、文末にくる語の強勢の位置によってピッチ上昇のタイミングが変わり、イントネーションが異なることが明らかとなっている。ブラジル発音では、文末の語のアクセントがある音節に向かって上昇、続く音節で下降するというイントネーションの型を持つ。一方ポルトガルでは、文末の語のアクセント位置に関係なく、最後尾の音節が上昇するイントネーションとなる。ブラジルのポルトガル語の上昇調イントネーションは、語末にアクセントのある語が文末に来る場合にのみ実現する。その為、疑問文を単に上昇調と認識していると、実際の会話コミュニケーションに支障がでてしまうこともありえる。

音声指導は、学習者の発音を細部にわたって矯正し、ネイティブのような完璧な発音を目指すものではない。また、これにより学習者が自身の発音に苦手意識を持ってしまうようでは本末転倒である。まずは音声的な基礎を得て、母国語にはない学習言語の音素の弁別の特徴を理解し、初学者のコミュニケーションの自信へとつなげていくことが肝要となる。また、新生アンケートで明らかとなった、学習者の発音に対する高い目標意識に応えられるよう、まずはカタカナ表記を改め、IPA表記の普及、音素目録に根ざした体系的な音声教育の確立が必要である。

（天理大学・京都外国語大学 非常勤講師）

[註]

- (1) 一ノ瀬敦編 (2015) 『プログレッシブポルトガル語辞典』小学館。
- (2) 彌永史郎・村松英理子 (2021) 『改訂新版 PORTUFONE: PCで学ぶポルトガル語の発音』西東舎。

コーチングを基盤としたスペイン語学修に
 関する自由記述回答の内容分析
 — 計量テキスト分析を用いて —

橋本 和美

昨今、学生の学修に関する問題の上位に「主体性の欠如」がある。発表者はこれを多少なりとも改善しうるメソッドとして「コーチング」に着目する。コーチングは、コーチが関わる動機付けによって、人が持っている意欲と能力を引き出し、問題解決や目標達成を支援する教育法であり、スポーツや医療、ビジネス、教育の場において盛んに実践されている。発表者はこれまで、大学で新たに学ぶ外国語の中でもスペイン語に焦点を当て、中学・高校時代から語学に苦手意識を持つ学修者にとって「記述式コーチング⁽¹⁾」が有効であることを「学習意欲の持続」や「成績の変化」から示唆してきた。

今回の発表では、これまでの実践対象者が回答した自由記述式アンケートに焦点を当て、これを計量テキスト分析することによって「学修者が授業で得たと感じることや自身の変化」について明らかにすることを試みた。分析にはKH Coderというフリーソフトウェアを用い、分析者の恣意的・主観的な解釈となる可能性を回避することに配慮し、自由記述回答をテキスト型データに変換して質的な計量テキスト分析を進めた。その結果、安心・安全な環境における学びを学修者は楽しいと感じ、他者との関わりや質問をするなど自己開示の行動が増えること、これらの主体的な取り組みが達成感につながることを示唆された。またコーチングに有効なのはコーチ（授業者）の対話スキルだけでなく、「安心感を与える傾聴」や「ペーシング」といった態度も重要であり、これらが安心・安全な場を作る可能性が高いという結果が得られた。一方、動機付けが持続しなかった点、達成感が具体的に何

に結びつくものかを明らかにできなかった点、本研究で得られた知見を一般化させるために対象者を増やし、また経年的な分析を深める必要性などが課題として挙げられた。

今後の外国語教育全般について言えることだが、AIの外圧も踏まえ、翻訳通訳のスキルアップ一辺倒といった従来の外国語教育のあり方を問い、新たな価値を見出す時がきている。コーチングというメソッドが外国語学修において汎用的かつ新たな意義を持つものになるのか検証していきたい。

(天理大学国際学部准教授)

[註]

(1) この教育実践は2本の柱から成る。1つ目は授業初回に行う「あり方の明確化」である。これは、学修者が自分はどのような人間か（あり方）を認識し、書き表すことによって「将来を見据えた動機付け」を行うことを目的とする。このワークは次の「3段階の思考」を発展させる：「①まず自らのあり方（Being）を明らかにする→②そこから創り出される行動（Doing）を考える→③行動した結果、得られるもの（Having）は何かを考える」。例えば「①自分は新しい知識を身に着きたい人間である→②毎日少しずつ〇〇の勉強をする→③結果として、資格を取得できる」となる。実践の2つ目は「振り返りシート」である。学修者は毎週授業終了前の5分を利用して振り返りシート（あり方に照らした振り返り・できたこと・できなかったこと・自由記述から成る）を記入する。授業者はこれにコーチングの要素を含んだコメント（承認・Iメッセージ・フィードバック等）をつけて翌週に返却する。このやりとりによって、授業時間を割くことなく1対1でコーチングの対話を実現させることを目指した。

お知らせ

◇天理大学アメリカス学会は、きたる12月4日(土)13時から天理大学研究棟3階第1会議室において、「第26回年次大会」を開催します。Zoomでの参加も可能です。オンライン参加を希望される場合は、本学会までメールでお知らせください。来場時は、マスク着用をお願いいたします。大会プログラムは以下のとおりです。

<総会>

13:00～13:15

開会挨拶・活動報告・会計報告

<年次大会>

13:15 開会の辞

13:20～14:20 研究発表1

中西光一氏(サンパウロ大学博士課程)

「南北戦争後のブラジルにおけるアフリカ系アメリカ人の記憶—2つの奴隷制の狭間で—」

14:20～15:20 研究発表2

山本晃司氏(天理大学准教授)

「ブランド名の強勢位置—英語の歴史的そして音韻的要因からの一考察—」

15:20～15:30 休憩

15:30～17:00 記念講演

中牧弘允氏(吹田市立博物館特別館長、国立民族学博物館・総合研究大学院大学名誉教授)

「暦とクリスマスで解くアメリカス」

17:00 閉会の辞・茶話会

◇記念講演をしてくださる中牧弘允先生は、人類学の立場から、日本、アメリカ、ブラジルの様々な宗教や会社文化について数多くのユニークな著作を出版されており、カレンダー文化についても研究界をリードされています。2017年には編者として『世界の暦文化事典』(丸善

出版)を出版され、再来年には『世界のクリスマス百科事典』が刊行される予定です。クリスマスを迎えるこの時期に、先生の機知に富んだユーモラスたっぷりなお話を聞かせていただけるものと思います。どうぞ、奮ってご聴講ください。

編集後記

◇今号の巻頭言は、国立民族学博物館名誉教授の山本紀夫先生にご執筆いただきました。玉稿で紹介されている『高地文明—「もう一つの四大文明」の発見』(中公新書)は本年6月に上梓され、すでに読売、毎日、産経、日経、週刊文春などで書評に取り上げられています。ご著書では、アメリカスを無視した「四大(大河)文明」説の見直しと、熱帯高地という補助線を用いた新たな文明史観が論じられます。ドメスティケーション(植物の栽培化と動物の家畜化)が文明の誕生と発展を導いたと、歴史学や考古学も踏まえつつ、農学と民族学的記述から丹念に論じられています。是非、本書でスケールの大きな全地球的見方を学ばせていただきたいと思います。

☆新入会員:

大越 翼(2021年6月入会)

江草千春(2021年8月入会)

◇当学会の年会費は、一般会員は5,000円です(入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 85 : 2021年11月9日発行)

発行者: 山田政信

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/